

宗教史研究のフィールドワーク論

代表者・コメンテータ・司会 大谷栄一

近代仏教研究における文献史料と文化資料

——梵暦資料の多様性——

岡田 正彦

昭和の初期に、幕末から明治期にかけて広がった仏教系の思想運動であり、西洋近代科学の自然観に対抗して仏典中の天文説にもとづく宇宙論を展開し、須弥山を中心にした平らな世界像の实在を主張した「梵暦運動」の実態調査を行なった工藤康海は、極めて多彩な側面を有する梵暦運動の全体像を把握するためには、少なくとも「梵暦道」、「宿曜道」、「梵医道」の三分野に分けて活動の詳細を探求する必要があると指摘している。

まず「梵暦道」は、「梵暦開祖」と称された普門円通（一七五四—一八三四）の体系化した仏教天文学を科学理論として洗練し、天文学としての精度を高めようとした活動である。「宿曜道」は、宿曜経や日藏経（大集経日藏分）などをもとに再編した「仏暦」を一般に頒布し、独自の暦を普及する活動であった。さらに「梵医道」は、円通の遺志によって確立された「梵医方」をもとに、処方した薬を広く頒布する活動であった。工藤は、これらの活動の実態調査を長年継続し、『梵暦運動史の研究』と題する著書の出版を企画していたが、これは終戦の混乱のなかで失われて現在には伝わっていない。本発表では、工藤が指摘した梵暦運動の多彩な活動を各地に残る史料をもとに

再構成しながら、広範な運動の全体像に迫ってきたい。

普門円通を開祖とする梵暦運動は、円通が主著である『佛國曆象編』を刊行した文化七年（一八一〇）頃を起点にしても、ほぼ一〇〇年近くの間、新たな理論や活動を生みだしながら広く多彩な活動を展開した。仏教系の思想運動でありながら、天文観測や暦表の計算、須弥山儀のような精密機器の製作、仏暦の頒布や梵医方にもとづく売薬といった多彩な活動を展開した「梵暦関係史料」の多様性は、近代以前の「宗教」をめぐる学知の豊穡な広がりを示すとともに、近代的な「宗教」の枠組みの偏狭さをあらためて示しているのではないだろうか。

近代的な「宗教」の枠組みのもとで再構築される以前の仏教思想には、人々の生活と密着したさまざまな「知」の体系が広く組み込まれていた。天文学や医学の知識、文献考証や基本的な読み書き能力の取得まで、僧侶が地域社会の人々の知的活動に広く関わっていたことは間違いないだろう。このことが、伝統的な知識というよりは、新たな知識というべき「仏教天文学」や「梵医方」、「宿曜占法」などを取り込んだ、梵暦社中の人々の活動が地域社会に広く受け入れられたことの背景にある。

ただし、この状況は明治維新を経て一変することになる。廃仏毀釈から大教宣布運動、政教分離運動から教団としての仏教各派の成立へと、目まぐるしく変動していく仏教をめぐる政治的・社会的・文化的状況の変化について、梵暦運動の側から見ていく視座も必要ではなからうか。

また、近代以前の仏教をめぐる「知」の豊饒性と多様性を反

映するとともに、人々の日常生活と深く関わりながら、近代科学の知見や技術を取り込んでいった梵暦運動の痕跡には、文献史料より以上に多くの情報を含む多彩なモノ史料が含まれている。

須弥山儀のような特殊な機械は、技術史や科学史を含む学際的な研究の交点において、近世・近代の仏教思想史を考察することの必要性を感じさせてくれる。さらには、暦法の研究や頒暦の実態調査などは、宗教史の枠組みを踏み越えた広い知識を研究者に要請するだろう。まさにこのことが、近世と近代における「知」の断裂を示しているのであり、この断裂を背景として生じる近代的「宗教」概念の成立基盤を逆照射しているように感じるのである。

佐田介石をめぐる史料調査とその重層

—— 浅野研真から谷川穰まで ——

谷川 穰

歴史研究における「史料調査論」という場合、何を論じれば「正解」なのだろう。研究論文を読み使用史料を探す初歩から、ネットの駆使、未刊行・手稿史料の発見方法、聞き取りの方法、等々。史料保存やアーカイヴズ学とは重なりつつも、少し違うか。多分、論文作成や自治体史編纂などの必要に迫られて、いきなり「さあ泳げ」式の実地経験をすればよい、論などない、体験談だけがある、これが身も蓋もない正解なのかもしれない。よってひとまず、ここ一〇年ほど行ってきた、私自身の佐田介石に関する史料調査履歴の一端を示し、先学の史料と

の関わり方を通じて、冒頭の問いをめぐる問題を些か述べる。

介石研究の系譜を辿ると、弟子による伝記と追憶（一八八三—一九〇一年）・称賛交じりの「過去の遺物」化（一九〇一—二〇年代）・顕彰の再浮上（一九二〇年代—四五五年）の三期に大別できる。特に第三期、一九三四年に本格的な伝記を著した社会学者・浅野研真と、彼と協働した上坂倉次という二人の存在が浮かび上がる。彼らが史料の収集・紹介を行うことで、本庄栄治郎後の介石研究の水準も大きく上がった観がある。

そこで彼らの史料調査のありようを探ってみる。浅野は介石の著作を古書店に確保してもらい購入したり、介石関係者の子孫へハガキで問い合わせ郵送してもらったりするのが主たる方法であった。また反響を期待した多種の新聞・雑誌への執筆、収集した介石著作・遺品の展覧会の開催など、史料への「縁」の種を蒔いた。また上坂は一九三九年の浅野急逝後、史料・メモ類を引き継いだ。そして『佐田介石全集』等の刊行のため、メモ類を手がかりに沼津や熊本などへ調査旅行に出、介石書簡を筆写したノートなどを入手した。媒体は違うが、いずれも現代の我々の営為とそう大きくは異ならない。

こうした「遺志を継ぐ」かの如き史料のリレーのバトンは、現在私の手に渡っている。私は二〇世紀末頃から各図書館で著作や関係者書簡等の刊行史料を、浅野や本庄の著作を手がかりに探索したが、個別寺院への史料調査は空振りの連続であった。二〇〇二年、峰島旭雄論文の謝辞から浅野の長男・文雄氏宅に難儀の末訪問でき、若干の聞き取りと、上坂の遺族から託された介石関係史料四八四点を寄託され、内容目録を完成させ